BRITISH COUNCIL

セミナーレポート

思考力や表現力の育成には多種多様なテクストを！

―「ジャンル」を意識すると英語授業はどう変わるのか

2026 年 3 月 28 日開催

新潟医療福祉大学
今井理恵氏

Contents

第 1 部　ジャンル 2
なぜ英語のテクストは分かりにくいのか 2
「ジャンル」とは何か 3
「テクスト」とは何か 5
日本の教科書分析から見える課題 6
教科書に「説明」テクストが多いことの影響 6
第 2 部　ジャンル準拠教育 8
ジャンル準拠教育と TLC 8
ジャンル準拠教育の意義 9

生徒が「読むこと」や「書くこと」でつまずく背景には、語彙や文法だけでなく、文章の目的や構成、言語的特徴を十分に捉えられていないことがあります。そして、このような視点は、生徒だけでなく指導者の側でも十分に意識されていない場合があります。

こうした目的や構成、言語的特徴のまとまりは「ジャンル」と呼ばれます。大学共通テストでも、物語文、説明文、意見文など多様なジャンルの英文が、記事やメール等のさまざまなテクストフォーマットで提示されており、生徒にはそれぞれの特徴を踏まえた理解や表現が求められています。

そこで英語の授業では、文章を単なる語彙や文法の集まりとしてではなく、ジャンルを意識して指導することが重要になります。これは入試対策にとどまらず、生徒の思考力・判断力・表現力等を育成し、実際の言語使用者として多様な場面で言語を活用する力につながります。

本セミナーでは、「ジャンルとは何か」を整理するとともに、「まとまりのある文章」や「言語活動」との関係を確認し、英語授業においてジャンルを意識することの意義と具体的な活用方法について紹介しました。

参加者の方々からは非常に高い評価が寄せられました。

- *「これまで読解指導が言語材料に偏っていましたが、そこにジャンルという視点が加わることで、テクストの理解も深まり、ライティング指導にも生かせると感じました」*
- *「リーディング・リスニング指導の中で、ジャンルによって読み方・聞き方が変わるということは実感として持っていましたが、ジャンル指導の重要性の根拠や具体的な指導方法について初めて学ぶことができました」*

第 1 部　ジャンル

なぜ英語のテクストは分かりにくいのか

「ジャンル」という言葉は、近年の英語教育研究や教科書、入試問題分析などでは見られるようになってきました。けれども、学校現場では必ずしも十分に共有されているとは言えません。

まず、次の英語の文章を見てください。語彙や文法は非常にやさしい文章です。しかし、この文章が、「誰から誰へ」「何のために」書かれたのか、これに明確に答えることは容易ではありません。

Good morning, I hope you had a good sleep. Today is Wednesday, April 16. The weather is sunny and warm today. Please remember to bring water for sports activities.

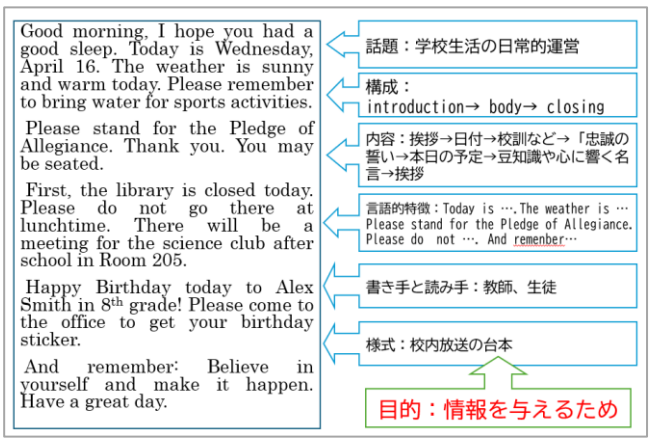
Please stand for the Pledge of Allegiance. Thank you. You may be seated.

First, the library is closed today. Please do not go there at lunchtime. There will be a meeting for the science club after school in Room 205.

Happy Birthday today to Alex Smith in 8th grade! Please come to the office to get your birthday sticker.

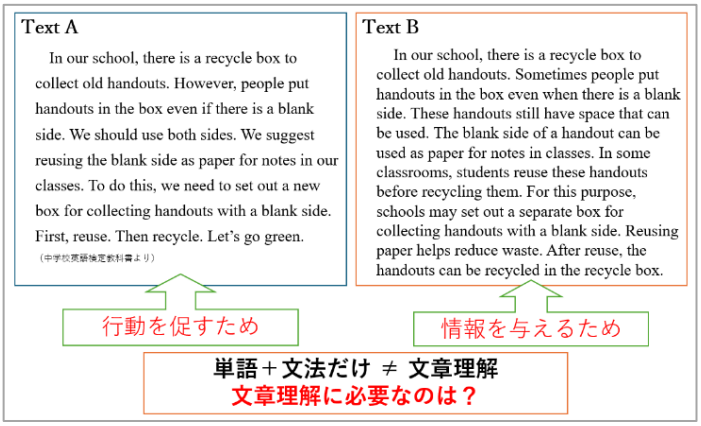
And remember: Believe in yourself and make it happen. Have a great day.

実はこれは、アメリカの学校の朝の校内放送で使われる原稿で、教師が生徒に向けて、学校生活に関する連絡や指示を伝えるためのテクストです。テクストフォーマットとしては校内放送の台本にあたります。では、なぜこの文章は読みにくかったのでしょうか。その理由は語彙や文法ではありません。誰が誰に向けて話しているのか、何のための文章なのか、そしてどのような流れで内容が展開されるのかという、このテクスト特有の「お決まりの型」が見えていなかったからです。



文章を理解するためには、語彙や文法を理解するだけでは不十分です。その文章が誰（書き手）から誰（読み手）に向けて書かれたものなのか、何を目的としているのか、どのような構成や型で組み立てられているのかを捉えることで、文章全体を見通しながら読むことが重要です。

次に以下の 2 つの文章を見てください。同じトピックを扱い、使われている語彙や文法もほとんど同じです。ですが、書かれた目的が異なっています。



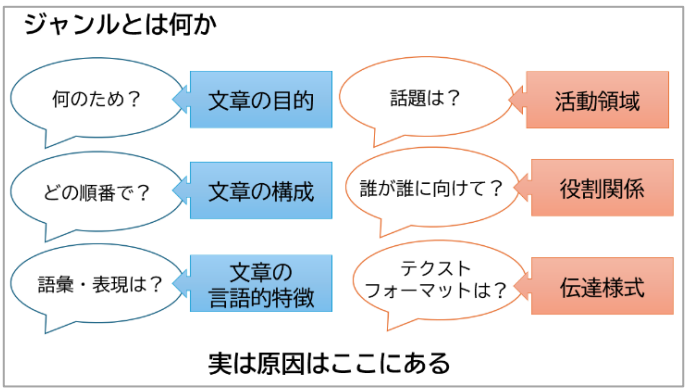
この例をとっても、トピックや語彙・文法だけわかっていても文章を理解できるわけではない、ということがわかります。読む時も書く時も、生徒が「わからない」と感じる時、そこには語彙力や文法力だけでは説明できない要因があるからです。

例えば、「school」「student」「uniform」を使って 3 文書きなさいと指示すると、単語の意味は分かっているのに、手が止まってしまう生徒がいます。私たちはつい「英語力が足りないからだ」と考えがちですが、必ずしもそうとは限りません。その生徒には、「何を」「誰に向けて」「何のために」「どのような言葉遣いで」「どのような順番で」書けばよいのかという見通しがないのです。つまり、書けない理由は語彙や文法だけでなく、テクストの目的や構成が見えていないことにもあるのです。

「ジャンル」とは何か

読む場合でも書く場合でも、私たちは無意識のうちにさまざまな知識を使っています。例えば、その文章は何のために書かれているのか、どのような構成で展開されるのか、誰に向けたものなのか、といった情報です。こうした見通しがもてないと、生徒は「何を書けばよいか分からない」「何が書かれているのか分からない」と感じてしまいます。

- 社会的目的（何のための文章か）
- 構成（どのような順序で内容が展開されるか）
- 言語的特徴（どのような語彙や表現が用いられるか）
- 書き手［話し手］と 読み手［聞き手］（誰から誰に向けた文章か）
- テクストフォーマット（メール、記事、放送原稿）



これらの情報をまとめたものが「ジャンル」です。

ジャンル（Genre）

- 特定の文化の中で見られる、日常的・学術的・文学的なテクストに共通する、認識可能で繰り返し現れる型のこと
- 社会的目的に応じた構成、内容、言語的特徴を含む

すなわちジャンルとは、「文章の目的に応じて生じる構成・内容・言語の特徴から成る型」のことです。例えば、物語文、説明文、意見文などは、それぞれ異なるジャンルに属します。これらは目的が異なるため、文章の構成も、そこで使われている言葉遣いも違ってきます。

ここまでジャンルについて見てきましたが、ジャンルに基づく授業を考える上では、「ジャンル」と「テクストフォーマット」を区別して考えることも重要です。

先ほどは理解しやすくするために、メールや記事なども含めて説明しましたが、厳密には、ジャンルは文章の目的や、それに応じた構成・内容・言語的特徴を指します。一方、テクストフォーマットは、その文章がどのような形（外見）で世の中に現れるかを指します。

例えば、「意見を述べる」という同じジャンルでも、新聞の投書として書くこともあれば、メールとして送ることもあります。逆に、「メール」という同じテクストフォーマットでも、依頼を書くこともあれば、説明を行うこともあります。

テクストフォーマット（Text Format）

- 文章の具体的な形（外見）や媒体
- メール、手紙、新聞記事、ポスター、レポートなど

したがって、文章は次の 2 つの視点からとらえることができます。

- ジャンル＝何のために書くのか（社会的目的・構成・内容・言語的特徴）
- テクストフォーマット＝どの形（外見）で現れるか（媒体・形式）

さらに、その文章が誰から誰に向けられたものなのかという役割関係（例えば、教師から生徒へ、生徒から友人へ）も、用いられる言葉遣いや構成に影響を与えます。

では、こうした「ジャンル」は研究者によってどのように説明しているのでしょうか。代表的な定義を二つ見てみます。

ジャンルは「テクストタイプ」とも呼ばれることもあります。映画などではテーマの分類に用いますが、英語教育ではテクストの機能、社会的目的による分類に用います。

上図の定義②には、「日常的（everyday）」「学術的（academic）」「文学的（literary）」なテクストとあります。オーストラリアなどの英語圏では、学校で扱われるジャンルとして、学術的・文学的なテクストが中心となる傾向があります。日常的なテクストについては、生徒が普段の生活の中で触れており、その背景となる文化や社会のコンテクスト（文脈）も共有しているため、改めて学校で学ぶ必要性がそれほど高くないからです。

一方、日本の生徒は英語圏の文化的コンテクストを十分に共有していません。そのため、英語圏の人々にとっては身近な日常的テクストであっても、「何のための文章なのか」「どのような構成で書かれているのか」を読み取るのは一苦労です。英語圏の生徒であれば日常生活の中で自然に獲得している知識や経験が前提となっていますが、日本の生徒にはその前提がないからです。まして、学術的なテクストとなれば、生徒にとって内容そのものへの馴染みも乏しく、その難しさはさらに大きくなります。

だからこそ、日本の学校英語教育では、学術的・文学的なテクストだけでなく、日常的なテクストについても「自然に理解できるはずだ」とみなすのではなく、その社会的目的や構成、言語的特徴を明示的に指導する必要があるのです。

整理のポイント

文化のコンテクストとジャンル
テクスト（まとまりのある文章）は**文化の中の社会的目的**と結びついています。

ポイント	詳細
ジャンル Genre （文章の型）	社会的目的を達成するために、**慣習的に使われる文章の型**が生まれます。 これが**ジャンル（Genre）**です。
分かり易い定義① Derewianca & Jones（2016, p. 329）	Genre: the ways in which we achieve our social purposes through language. [ジャンル：言語を通して社会的目的を達成するための方法。]
分かり易い定義② Hammond, J., & Derewianka, B.（2001, p.186）	The recognisable and recurring patterns of everyday, academic and literary texts that occur within particular cultures. ［特定の文化の中で見られる、日常的・学術的・文学的なテクストに共通する、認識可能で繰り返し現れる型。］

「テクスト」とは何か

次にテクストについて整理します。

整理のポイント

文化のコンテクストとジャンル
テクスト（まとまりのある文章）は**文化の中の社会的活動**と結びついています。

ポイント	詳細
「まとまりのある・・」 H30『高等学校学習指導要領』	H30高等学校学習指導要領では、「まとまりのある文章/内容/考えや意図/形/長さ」 「まとまりのある…」という文言が聞く・読む・話す・書くことのすべての技能の解説で述べられている。 p. 57「高等学校においては，中学校において指導された内容を必要に応じて繰り返し扱いながら，場面に応じた適切な表現を選択し，論理の展開を意識したりしながらまとまりのある考えや意図を伝えられるよう指導する。」（解説）
分かり易い定義 ①text　テクスト リチャーズ・シュミット、(2013, p. 479)	以下のような特徴を持つ音声言語または書記言語の単位：(1) 通常、手紙、報告文、エッセイなどといった一つの構造や単位を構成する複数の文からなる（しかし、警告の標識であるDANGERのように、一語のテクストもある）。(2) 明確な構造的、談話的特徴を持つ。(3) 特定のコミュニケーションの機能と目的を持つ。(4) 使われる場面に関連させて初めてそのテクストを完全に理解することができる。（後略）

学習指導要領では、「まとまりのある」という表現が、各技能の解説の中で繰り返し用いられています。また、各技能を伸ばすための手段として、言語活動が重視されています。

言語活動は、単語や一文ではなく、「まとまりのある」言語を対象としています。つまり、学習指導要領は、意味や目的をもった言語のまとまりを単位とした活動を前提としているのです。

整理のポイント

文化のコンテクストとジャンル
テクスト（まとまりのある文章）は**文化の中の社会的活動**と結びついています。

ポイント	詳細
「まとまりのある・・」 H30『高等学校学習指導要領』	H30高等学校学習指導要領では、「まとまりのある文章/内容/考えや意図/形/長さ」 「まとまりのある…」という文言が聞く・読む・話す・書くことのすべての技能の解説で述べられている。 p. 57「高等学校においては，中学校において指導された内容を必要に応じて繰り返し扱いながら，場面に応じた適切な表現を選択し，論理の展開を意識したりしながらまとまりのある考えや意図を伝えられるよう指導する。」（解説）
分かり易い定義 ①text　テクスト リチャーズ・シュミット、(2013, p. 479)	以下のような特徴を持つ音声言語または書記言語の単位：(1) 通常、手紙、報告文、エッセイなどといった一つの構造や単位を構成する複数の文からなる（しかし、警告の標識であるDANGERのように、一語のテクストもある）。(2) 明確な構造的、談話的特徴を持つ。(3) 特定のコミュニケーションの機能と目的を持つ。(4) 使われる場面に関連させて初めてそのテクストを完全に理解することができる。（後略）

このような、一つの意味や目的によって結び付けられた言語のまとまりを「テクスト」と呼びます。

テクストは書かれているもの以外の、映像や、デジタルにもあてはまります。すべてのテクストは目的を持った単位であると言えます。

それでは、この「テクスト」を授業ではどのように扱っていけばいいのでしょうか。

学習指導要領では、言語活動とは、実際に英語を使って考えや気持ちを伝え合う活動とされています。つまり、単なる語彙とか文法の練習ではありません。言語活動で扱うべきなのは、意味のある単位としてのテクストということになります。

そして、そのテクストはジャンルを持っています。つまり、ジャンルを意識してテクストを指導することが、言語活動の前提になります。

日本の教科書分析から見える課題

では、なぜジャンルという視点が日本の英語教育に必要なのでしょうか。教科書には、本文の前にリード文が置かれることが多く、場面や状況は示されています。けれども、このテクストは「何のための文章なのか」「書き手の目的は何であるのか」が明示されることは、ほとんどありません。

なぜジャンルを教える必要があるのか―理由①

（「英語コミュニケーションⅠ」の教科書を参考に以下類似例文を作成）

- Setting: Yamada Hanako is giving a lecture.（山田花子さんが，講演をしています。）［教科書A］
- 英国出身のモニカ先生が明にダンスの動画を見せています。［教科書B］
- 英語の授業でALTのジョン先生が日本の観光地について話をしています。［教科書C］
- Emily reads an online encyclopedia to get information about Mother Teresa.［教科書D］

「場面・状況」はある　「目的」は？

その結果、読みの指導は語彙、文法、内容理解に焦点が当たりやすくなり、文章を「文の集合」として読むことになりがちで、先にジャンルの定義でみたように、何らかの「社会的目的」を果たすための一つのテクストとして読むことができなくなります。テクストが本来持つ、「書き手の目的」という視点が抜け落ちているのです。

学習指導要領では、目的・場面・状況を踏まえて読むことが求められています。けれども、実際の授業や教科書では、目的が十分に扱われていないというのが現状です。

- H30『高等学校学習指導要領』の「読むこと」の目標

「... 必要な情報を読み取り，書き手の意図を把握することができるようにする。... 必要な情報を読み取り，概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。」（p. 163）

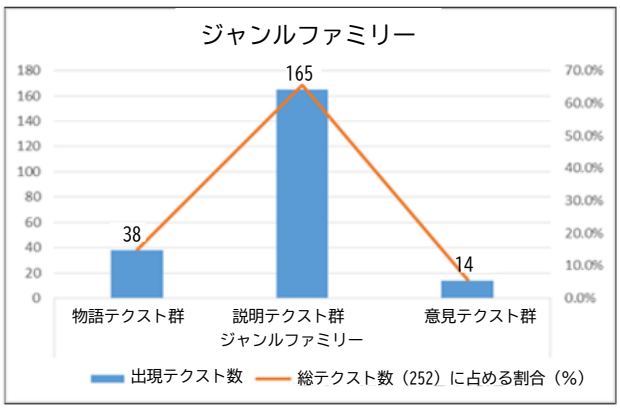
- 「令和８年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針 」

「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。」（大学入試センター，2025，p. 7）

この点を制度ではどのように位置付けているのかというと、学習指導要領の読むことでは、その目標として明確に、「書き手の意図を把握する。」、「目的に応じて読む」と明記しています。つまり「読む」とは、単にテクストの内容をなぞるだけでなく、その社会的目的（何のために書かれたのか）を踏まえて読解することだと位置づけられています。そして、この読解力は、ジャンルを意識した指導を行うことで初めて育成できると考えています。

教科書に「説明」テクストが多いことの影響

教科書に掲載されているテクストを調査すると、その約7割が説明文です。教科書中心の授業では、生徒はほとんど説明文しか読んでいないことになります。



（今井・峯島・松沢，2019）

- 説明ジャンルに大きく偏る。
- 生徒はほとんど「説明文」しか読んでいない

- 本来、読む力とは、さまざまなテクストの型に触れる中で育つ
- その結果、読む力や表現力が、特定のテクストに偏る可能性

教師が様々なジャンルを意識して授業を設計する必要がある

本来、読む力や表現力は、さまざまなテクストの型に触れる中で育つものです。しかし、現状では特定のジャンルに偏る危険性が高くなっています。だからこそ、教師が意識的にジャンルを授業設計に取り入れる必要があります。

ですが、幸いなことに、次期学習指導要領改訂に向けた議論では、叙述文 ・説明文・意見文などのジャンルが、「言語活動の例」ではなく、「内容」レベルで位置づけられつつあります。すなわち、ジャンルを意識した授業は、「やってもよいもの」ではなく、授業設計の基盤になりつつあるということです。

今一度、ジャンルとテクストフォーマットについて整理します。文章は何のために書くか、これ　によって決まる型が「ジャンル」でした。さらにそれが、メールなのか記事なのかポスターなのか、どの形（外見）で世の中に現れ出るのかが「テクストフォーマット」でした。

ジャンルは目的、テクストフォーマットは形式のことです。例えば、同じ「意見」というジャンルでも、メールで書けば簡潔で個人的な文章になりますし、新聞の投書として書けば、より論理的で公共的な文章になります。

整理のポイント

ジャンルとテクストフォーマット
ジャンルは「何のために書くか」を決め、テクストフォーマットは「どの形で表すか」を決めます。フォーマットは、ジャンルを社会の中で具体的に機能させる手段です。

社会的目的	ジャンル
出来事を語る	Narrative
情報を報告する	Report
仕組みを説明する	Explanation
意見を主張する	Argument

WIDA（2020）4ジャンルファミリー

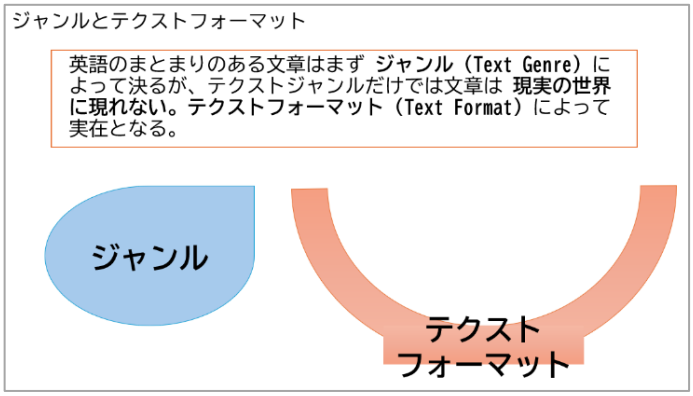
テクストフォーマット
対話、スピーチ、プレゼン、インタビュー、メール、手紙、新聞記事、本の頁、テキストメッセージ、Show & tell、ブログ、ダイアリー、講義、ディベート、台本

教科書に見られるテクストフォーマット

（今井・峯島・松沢，2019）

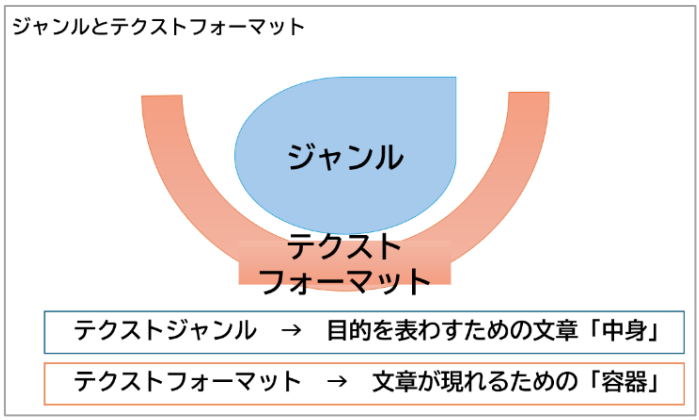
また、同じメールというテクストフォーマットでも、誰が誰に向けて書くのかによって文章は大きく変わります。例えば、友人へのメールであればくだけた表現が使われますが、大学教員や会社の担当者へのメールであれば、より丁寧で形式的な表現が求められます。さらに、地域住民への案内や保護者への連絡のように、多くの人に向けて発信される場合には、同じメールでも公共的な性格をもつ文章になります。

つまり、ジャンルが中身を決め、テクストフォーマットがその現れ方を決めるのです。ジャンルを文章の中身とすれば、テクストフォーマットはそれを入れる容器と言えるでしょう。同じ中身でも、メールという容器に入れるのか、新聞記事という容器に入れるのかによって、その見え方は変わります。そして、その文章が誰から誰に向けられたものなのかという役割関係も、実際の言葉遣いや構成に大きな影響を与えます。（右下図）



テクストは、文化のコンテクストで決まる特徴と状況のコンテクストで決まる特徴によって成り立っています。これらをまとめて「ジャンルの知識 (genre knowledge)」と呼びます。

研究でも、学習者がジャンルの知識を持つと、テクストが理解しやすくなることが示されています。つまり、何を手がかりに読めば良いのかがわかります。聞く場合も、何を手がかりに聞けば良いのかがわかるということです。



冒頭に示した校内放送の台本は、見る形では「台本」ですが、聞くことになれば校内放送の音声（テクスト）になります。それもジャンル、テクストの知識があれば聞き取りやすくなります。

第 2 部　ジャンル準拠教育

ジャンル準拠教育と TLC

ジャンルに基づく授業は、ジャンル準拠教育（GBP）という考え方に基づいています。テクストがどのような文化的・状況的コンテクストにおいて、どのような目的で書かれるのかを明確にし、そこから構成や言語を考え、その型を明示的に指導する教育のことです。

このジャンル準拠拠育はオーストラリアで始まり、シンガポール、北米など、世界各国で実践されています。 これは書くことの指導から始まり、現在は読むこと、聞くこと、話すことの指導にも広がっています。

豪州の小学校英語教育で扱われてきた３ジャンル

社会的目的	テクストの目的	ジャンル
To entertain	ストーリーを語り，読み手に楽しみを与える文章	Recount / Narrative / Anecdote
To inform	出来事を報告する文章	Report / Description / Information report
	物事を説明する文章	Explanation
To persuade	意見を述べる文章	Exposition / Discussion / Argument

Students learn to:
- read and understand a range of imaginative, informative and persuasive texts
- create written and multimodal texts that tell stories, persuade and explain

Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority [ACARA]. (2022). *Australian Curriculum: [English] (Version 9.0).* https://www.australiancurriculum.edu.au/help/search-results?faqQuery=persuade&faqSearchPath=%2Fcontent%2Facara-curriculum%2Fau%2Fen%2Fhelp&offset=0

オーストラリアではテクストが「楽しませる」「情報を与える」「説得する」の三つの目的で分類されています。ジャンルとしては、「物語文」「説明文」「意見文」に対応します。（右上表）

北米では「物語る」「説明する」「因果関係を説明する」「意見を述べる」に分けています。分類の仕方は異なりますが、目的でテクストを整理するということは共通しています。

では、このジャンルを実際の授業でどのように指導するのか。そこで用いられるのが、Teaching-Learning Cycle（TLC）と呼ばれるジャンル準拠教育で用いられる指導過程です。この理論的背景には、「言語を意味生成の資源」と捉える体系機能言語学（Systemic Functional Linguistic: SFL）と、「学習は支援の中で進む」とする社会文化理論（Sociocultural Theory）があります。

TLC は、次のように段階的に進みます。（右図）

1. モデルテクストのコンテクスト（文脈）を理解する
2. モデルテクストの構成・内容・言語的特徴を分析する
3. パラレルテクストを支援付きで読む（書く・聞く・話す）
4. パラレルテクストを支援を外して自力で読む（書く・聞く・話す）
5. 振り返る

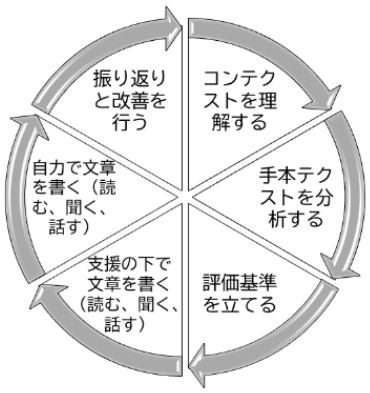
読むことの指導では、まずモデルテクストをお手本にして、そのジャンル特有の読み方を学びます。生徒は、このテクストが何のために書かれた文章なのか、どのような構成をもち、どのような言語的特徴があるのかを分析します。

次に、生徒は、モデルテクストと同じジャンルに属する別のテクスト（パラレルテクスト）を、教師の支援を受けながら読みます。パラレルテクストとは、教科書本文であるモデルテクストと同じジャンルをもつ別のテクストのことです。その後、教師は徐々に支援を外し、生徒は同じ分析の観点を用いて自力で読み進めていきます。

重要なのは、生徒に「モデルテクストで学んだジャンルの知識を使えば、自分で新しいテクストも読める」という実感をもたせることです。この段階を経ることで、生徒は単に「分かる」だけでなく、主体的に「できる」段階へと移行していきます。

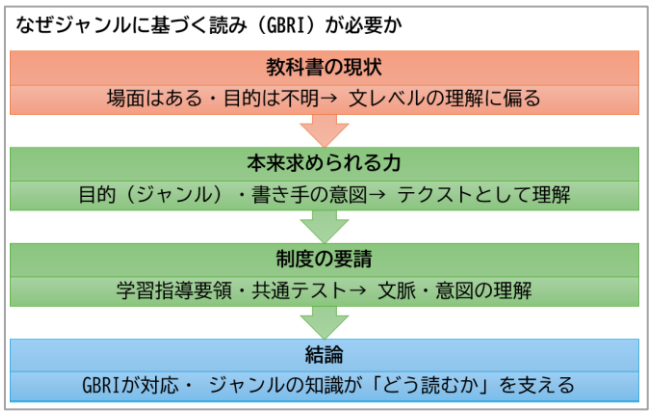
TLC全体の流れ―TLCは他の技能にも応用できる

TLCの指導過程は、特定の技能に限定されるものではなく、
すべての技能の指導・学習と評価に共通して用いる枠組み



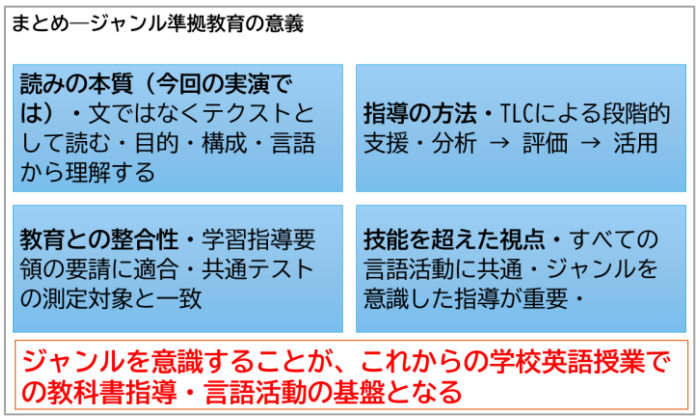
また、TLC はすべての段階を授業内で行う必要はありません。モデルテクストの分析を宿題にしたり、共同組立の一部を簡略化したりするなど、現場の実情に応じて柔軟に調整することが可能です。

ジャンル準拠の指導は、従来の精読指導を否定するものではありません。精読はもちろん重要です。ただし、その前に生徒にジャンルについての知識を与えることで、文章の見え方が大きく変わってきます。



従来の精読が、一文一文の意味を積み上げながら理解していくボトムアップの読みを重視するとすれば、ジャンルの知識は、文章全体の目的や構成を見通しながら読むトップダウンの読みを支える手がかりになります。生徒は「この文章は何のために書かれているのか」「次にどのような内容が来るのか」を予測しながら読むことができるようになります。つまり、ジャンル準拠の指導は精読と対立するものではなく、精読をより効果的にするための補助線とも言えます。一文一文の意味を追うだけでなく、「テクスト全体がどの目的に向かって構成されているのか」を捉える読みへと視点を広げることができるのです。

ジャンル準拠教育の意義



教科書では場面は示されますが、テクストの目的が見えにくい、ということを高校検定教科書の事例を用いて確認しました 。そのため授業では教師も生徒も文レベルの理解に偏りがちでした。

しかし、本来「読む」とは、文章を文の集合としてではなく、一つのまとまりのあるテクストとして理解することです。そのためには、ジャンルの知識を明示的に指導し、生徒がその知識を使って自力で読めるようにする必要があります。

そして、学習指導要領や共通テストでも求められている力も書き手の意図やテクストの目的を踏まえて読む力でした。そして、現状の読みの指導と目指すべき読みの指導のギャップを埋める（橋渡しをする）のが、ジャンル準拠リーディング指導（Genre-Based Reading Instruction：GBRI）です。

GBRI によって生徒が、「読むこと」を単に文の積み重ねとして理解するのではなく、まとまりのある一つの「テクスト」として理解するために、教師がジャンルの知識を明示的に教えることを目指します。これを、先にお伝えした、TLC という指導過程で実現します。

生徒が文章を読めない理由は、語彙や文法の不足だけではありません。「その文章が何のために書かれているのか」が見えていないことも大きな要因です。ジャンルの視点を取り入れることで、生徒は文章の目的や構成、適切な読み方・扱い方を理解できるようになり、言語活動はより意味のあるものになります。

また、ジャンルを意識することは、「読むこと」に限りません。「書くこと」「話すこと」「聞くこと」を含むすべての言語活動に関わり、まとまりのあるテクストを理解したり、発信したりする力の基盤となります。生徒がそのような力を身につけられるよう支援することこそが、ジャンル準拠教育の意義なのです。

以上

（お断り：本セミナーでは、高校検定教科書からの事例紹介がありましたが、本稿では割愛しています）

■ジャンルについては、以下の記事も併せてご参照ください。

- 今井理恵（2023）「ジャンル準拠リーディング指導で読みの指導に社会的アプローチを」『英語教育 8 月号』. 大修館書店.
- 今井理恵（2025）「生成 AI を活用するジャンル準拠ライティング指導」『英語教育増刊号・別冊』. 大修館書店.